

生成AIを 大学教員はどう使うか — 教育・研究における効用と危うさ —

(2026.08.30.)

山田 晴通 (東京経済大学)

yamada@tku.ac.jp

<抜粋版>

- はじめに
- 1. 生成AIを「使うか」から「どう使うか」へ
- 2. 実際に使ってみて有効だと感じること
- 3. ファクト／フェイク問題はどうか変わったか
- 4. AIによる採点は使える。しかし、それでよいのか
- 5. 学生の個人情報をAIに渡してよいのか
- 6. 学生のAI利用をどう考えるか
- おわりに

中心となる問いは...

「使うか／使わないか」

ではなく

「何をAIに任せ、何を人間に残すか」

1. 生成AIを「使うか」から 「どう使うか」へ

- この3年間で、問題の見え方が変わった
- 2023年：もっともらしい虚偽、架空文献、「AIを人間のように感じる」ことへの懸念
- 2026年：検索連携などで一部の弱点は軽減
- むしろ気になるのは、AIが「使えない」ことではなく、よく「使える」ことから生じる問題

2. 実際に使ってみて 有効だと感じること

- 研究：①壁打ち ②関連文献探索
③外国語文献の翻訳＋要約
④文章の推敲・構成整理

考えを整理するための「壁打ち」

長い外国語文献の一次的選別

「次に自分が何を読む・考えるか」を決める補助
として使う

2. 実際に使ってみて 有効だと感じること

- 研究：①壁打ち ②関連文献探索
③外国語文献の翻訳＋要約
④文章の推敲・構成整理
- 教育：⑤授業準備・教材作成 ⑥採点補助

後ほど、改めて ...

2. 実際に使ってみて 有効だと感じること

- 認知的オフローディングとしてのAI活用
- 人間は昔から、メモ・書籍・電卓・検索システムへ認知活動を外部化してきた
- 生成AIは、要約・比較・推論・文章構成・反論・評価まで代行できる
- 外部化そのものが悪いのではない
- 問題は、外部化した作業そのものが「経験され、学習されるべき課題」だった場合

2. 実際に使ってみて 有効だと感じること

- 「うまくできる」と「学んだ」は同じではない
 - desirable difficulties (望ましい困難)、
productive failure (生産的失敗)
 - 探しても見つからない、書いてみたが論理
が通らない...
 - その試行錯誤にも学習上の意味がある
- 短期的な performance の向上
≠ 長期的な learning の向上

3. ファクト／フェイク問題は どう変わったか

- 初期LLMでは、架空文献や書誌事項の誤りが大きな問題だった
- 現在：検索連携・RAG等で、実在資料へ遡りやすくなった
- しかし、論文が実在することと「自分の主張の根拠にできる」ことは別

3. ファクト／フェイク問題は どう変わったか

- 文献探索をめぐる問題は
「見つからない」から「見つかりすぎる」へ
- AIが示すのは「参考文献」ではなく「参考文献候補群」
- 探索が容易になるほど、人間側の選別・位置づけ・重要性判断が重要になり、負荷も大きくなる

4. AIによる採点は使える。 しかし、それでよいのか

- 課題・評価基準・尺度を明示すると、論述やレポートをかなり安定して評価できる
- 人間にも疲労・採点順・時間帯などによる評価の揺らぎがある
- しかし採点を任せると、教員自身が答案を読まなくなる
- 答案を読むことは、学生の理解・誤解・関心・予想外の着眼を知り、自分の授業を評価する行為でもある

4. AIによる採点は使える。 しかし、それでよいのか

AIを

「答案を読まなくてよくする装置」

ではなく、

「教員が読むべき答案を見つける装置」

として使えないか



例えば、共通誤答、特徴的答、
想定外の論点の抽出など

5. 学生の個人情報を AIに渡してよいのか

- 「入力＝必ず学習＝漏洩」と単純化するのも正確ではない
- 勿論、だからといって安心して個人情報や機微な情報を入れてもよい、という話ではありません！

5. 学生の個人情報を AIに渡してよいのか

- 「入力＝必ず学習＝漏洩」と単純化するのも正確ではない
- 学習利用・保存・オプトアウト・組織契約などの条件はサービスごとに異なる
- 実務上は、個人情報（氏名・学生番号等）を削除し、可能な限り仮名化するひと手間
- 大学の規程や、利用サービスの条件を確認する → 周知を求める

5. 学生の個人情報を AIに渡してよいのか

- ちなみに、少し論点はズれるが、一部の大学では、**学生にAI利用の申告を求める**方向になっている
- もし、学生にAI利用の申告を求めるのなら、教員側のAI利用についても情報を開示する、「**相互の透明性**」が必要ではないか

6. 学生のAI利用をどう考えるか

- 学生のAI利用は、一律の禁止／容認ではなく、学習目的から決める
- 外国語読解力を育てる課題
 - AI翻訳を制限する意味がある
- 外国語文献の内容を検討する課題
 - 翻訳をAIに任せ、
分析に時間を使う合理性がある

6. 学生のAI利用をどう考えるか

- 文章表現そのものが学習目標なら、全面生成は当然問題になる
- 逆に、AIの回答比較、誤りの検証、反論→再反論、プロンプトと修正過程の提出など、AIの使用が前提となる課題もありえる

おわりに

- 効率化によって失うものを見る
- 学生は「書く」ことをAIへ外部化できる
- 教員は「読む・採点する」ことを
- 研究者は「探す・要約する」ことを
AIへ外部化できる
- 苦労を残すのではなく、「効率化してよい非効率」と「必要な非効率」を区別する

おわりに

- 問い続けられるべき問いは、

「これはAIにできるか」ではなく
「これはAIに任せてよいか」

「任せることで、人間は何を失うのか」

参考文献表に代えて

- 2023年の日本コミュニケーション学会のシンポジウム「AIとコミュニケーション」の記録は『日本コミュニケーション研究』52 (2)
- 2025年の大学教育学会のシンポジウム「AIの有機的活用を目指す大学ライティング教育と支援体制に関する基礎的研究」の記録は『大学教育学会誌』47 (1)

参考文献表に代えて

- 山田は会員ではありませんが、
AI時代の教育学会（会長・中川一史 放送大学教授）という学会が、2019年に結成されており、結成当初から、『AI時代の教育論文誌』が刊行されています。

参考文献表に代えて

- 今回の報告の内容は、加筆・補強の上で、来年2月に刊行される東京経済大学の紀要『コミュニケーション科学』65号に投稿する予定です。

**コミュニケーション
科学** since 1994

yamada@tku.ac.jp